

生活者が持つ「倫理」に対するイメージの分析（I）

豊田尚吾¹

はじめに－問題意識

持続可能な社会、生活の構築に資する活動が大阪ガスエネルギー・文化研究所（CEL）のミッションである。その中で、生活経済の視点から社会を見た場合、制度上の問題点が持続可能性の足かせになっているという問題意識を持つ。

当然のことながら、そのような課題を解決する処方箋が簡単に見つかるわけもなく、地道な取り組みを積み重ねていくしかない。そのためにも、共有化することのできる理念、基本的な考えが必要になる。そこで重要なことが、「価値」である。

持続可能性を考えるということは「未来」を視野に入れるということである。当然、私たちの行動が未来に影響を与える。未来を創り出すと言ってもいいかもしれない。私たちが行動する場合、一般に選択肢は一つだけでなく、複数存在している。その中で何を選ぶかによって行動が変わり、結果も変わってくるとすると、後悔のない判断をするため、選択の基準が必要になる。選択の基準とは評価に関わることを意味し、「～だ」という事実認識に加えて、「～べきだ」という規範意識、価値論が不可欠になってくる。

本稿では、理念、哲学の中で、善悪、正邪という価値を扱うための論理の体系（の一つ）を「倫理」だととらえる。そして“生活経営における倫理の重要性”に注目する。ディスカッションペーパー9-01、10-02、10-03などで言及した「責任ある消費」、あるいは10-08での「社会的責任」といったテーマの中で、従来から生活者の倫理を論じてきた。ここでは、生活者の倫理に関して、より基本的な「意識」について、今一度検討することを試みる。

具体的には、次節において、持続可能性と社会の制度（これも規範の一種である）が抱えている問題を論じることで、本稿での問題意識を提示ししつつ、倫理がそこでどのような役割を持っているのかについて考えを述べる。

次に、生活の中での倫理性について、どのような意識と変化があるのかについて、データを用いて確認を行う。そして、生活者が持っている倫理という概念へのイメージが、社会として概観した場合、どのような構造を形作っているのかについて、テキストマイニングの手法を用いて検討を行う。

社会を治める制度の「失敗」

ディスカッションペーパー10-08でも紹介したように、私たちは福祉国家に生きており、それは「資本主義、社会保障、民主主義」という三層の公共的制度からなる（塩野谷（2002））。“資本主義は市場経済を通じて効率と革新を実現し、経済的基盤を提供する。社会保障は市場の補完を担い、社会的な秩序の維持、すなわち正義を提供する。民主主義は経済、政治の制御を図り、統治の基本となる。（ディスカッションペーパー10-08）”

しかしながら、それぞれの制度は完全ではなく、短所を持っている。逆に言えば、短所を持つからこそ、それを補完するような別の制度が必要になっているともいえる。資本主義は市場経済という、資源効率実現の道具を持っているものの、分配面での規範を持たず、いわゆる所得格差に対する持続可能性を保証することができない。また、外部（不）経済性にも対処できず、いわ

¹ 大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所（CEL） 主席研究員

ゆる「市場の失敗」の危険性という問題を抱えている。

それを補完するのが政府（公的部門）の役割である。行政機構という、専門的な判断力を持つ組織を用いることで、市場の失敗を発生させないような政策を実現するよう努める。ただし、行政機構は金銭による費用－便益分析といった、客観的な行動評価、つまり行動を制御するシステムを持たないため、しばしば肥大化を志向する傾向がある。

また、行政システムを制御（抑制）する力は、基本的に議会に委ねられているが、政治的駆け引きなどの要因が影響して、長期的に合理的な判断が歪められるリスクもある。これらを「政府の失敗」と表現する。

行政の暴走を監視し、抑制する権力としての議会は、主権者によって管理される。そしてその主権は日本においては国民に存する。その民主主義という制度は、主権者が健全な統治の実現という目的意識を持って、代議士を選択するという行動の実践を前提とする。

しかるに、民主主義教育が十分ではないためか、そもそも不特定多数の国民を主権者とする理念に不可避の現実なのか、少なくとも現状を見る限り、主権者である国民に、公平な観察者としての判断を期待することはできない。むしろ投票などの政治参加の機会を、自己利益の実現の手段と見なし、耳あたりのよい政策を訴える代議士候補者に投票するという行動がしばしば見られる。

その結果、大衆迎合的、あるいは地域や業界といった、特定のエゴを代表するような言動を行い、主権者の代表としての「価値判断」を行う意思のない代議士が、一定のシェアを占める議会を作ってしまうことになる。そして、政府を監視する役割を十分に果たすことのできない議会の実現につながってしまう。これが「民主主義の失敗」である。

上で述べたことは、一般論としての社会を、持続可能な存在として秩序立てていくために、先人が実現してきた制度の強みと弱みである。そして、社会を取り巻く潮流が、今まで論じてきた制度の失敗をより一層深刻な事態に陥らせる可能性が高い。

例えば、表1のように、制度の失敗（市場の失敗、政府の失敗、民主主義の失敗）は具体的には環境の悪化や、社会的な安心のシステムの毀損、政治的無関心などの自体を引き起こすリスクをもたらす。そして、グローバル化、エネルギー環境制約、少子高齢社会、情報コミュニケーション変革といった、社会的潮流が、その問題を増長させかねない。

表1

社会システム	効用	問題	具体例
市場経済	競争・ダイナミズム・効率的資源配分	市場の失敗（外部性・分配）	環境悪化、貧困問題
社会保障	安心・紐帯	政府の失敗（近視眼）	財政、年金システム破綻
民主主義	決定権・参加・自由	民主主義の失敗（エゴ）	政治的無関心アノミー
グローバル化	少子高齢社会	環境・エネルギー制約	情報コミュニケーション変革

このことについては季刊誌 CEL94 号の拙稿で論じているので詳細は省略する。その当否には様々な異論があるだろうが、少なくとも持続可能な社会の実現のために、整えられてきた制度も、完全ではないということを合意できれば十分である。

もしそうであるならば、制度だけに頼らず、それを利用する生活者自身の行動に注目する必要がある。このような主張が受け入れられるのではないだろうか。よく、一人一人の心構えが重要という、全く展望も裏付けもない結論を出して無理に収束させてしまう議論があるが、それでは意味がない。

どのように考え、どのように行動するかということに関し、それを個人の責任と判断に委ねるだけでは、次の変化につながらない。「～べきだ」ということに対し、もっと積極的にコミットしていく必要があるはずだというのが、本稿の底にある問題意識である。

その場合に、最も重要なキーワードとなるのが「倫理」である。ここで言葉としての倫理の定義を行っておくと、本稿では「社会を構成する人々が共存するためのルール」である。これは塩野谷(2002)や山脇(2002)を参考に決定したものであり、詳しくはCELレポート36号(倫理的消費の可能性と課題～2008年度生活経済学会 関西部会における報告内容～)²をご参照願いたい。

倫理を「～べきだ」すなわち義務と考える場合、必ず守らなければならない絶対義務と守ることが期待される不完全義務に分けるという考えがある。前者は一般に法律という形で社会に受け入れられている。これに関しては法令遵守の問題として切り離し、本稿では取り扱わない。むしろ不完全義務である倫理的義務に関して、生活者がどのように考え、どのようにコミットしているか。次節以降でそれを検討する。

身近な倫理に関する生活者の態度

本節では、日常生活で頻発する身近な出来事に対する、生活者の態度について確認する。具体的には、大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所が行っている、生活者を対象としたWEB調査「ライフスタイルに関するアンケート」の結果を用いて、生活者の倫理に対する意識と行動についてデータを確認する。

(1) 倫理的行動に関する意識

2009年と2010年に、日常の習慣に関する質問を行った。例えば、「車がないときも信号を守る」か、といったものである。これに対して「できている、している」という回答あるいは、実行していない場合には、その理由を回答してもらった。「そもそもそれがすべきことだとは思わないから」といったいくつかの理由と「その他」という選択肢を提示した。

結果を表2に纏めてある。

%

	できている、している	できていない、していない									
		そもそもそれがすべきことだとは思わないから	それほど重要だと思わないから	自分との関わりがあまりないから	自分一人が行動したとしても有効とは思えないから	自分の得にならないことはする気になれないから	社会がそれほど求められているとは思えないから	能力や時間などの制約が大きいから	しなくても誰からも何も言われないから	それをしていない人が多いから	その他
1. 車がないときも信号を守る	65.9	6.0	8.2	0.8	2.6	1.4	2.2	4.5	3.4	1.9	7.5
前年比	-3.5	-0.4	1.0	-0.2	-0.1	-0.2	0.0	0.4	-0.7	0.1	-3.7
2. 店で物を買ったときにお礼を言う	69.6	9.0	5.5	1.9	1.1	0.9	3.1	0.3	2.6	3.6	5.8
前年比	-0.5	0.6	-0.9	-0.5	0.1	-0.1	0.0	0.0	-0.9	0.2	1.8
3. 近所で出会った人に挨拶をする	81.6	2.0	1.8	6.1	0.9	0.9	1.5	0.2	1.4	2.4	3.6
前年比	-1.4	-0.3	-0.4	1.0	-0.3	0.0	0.4	-0.2	0.0	0.4	0.8
4. 高くても地元で作った農作物を買う	24.5	14.2	10.6	8.1	3.7	10.3	3.3	5.2	5.5	2.4	20.6
前年比	-4.3	-0.6	-2.6	-0.7	-0.2	3.9	0.0	-0.4	-0.7	-0.5	6.1
5. 地域のボランティア活動に参加する	18.3	8.9	5.7	16.5	3.4	4.0	3.5	20.8	5.4	5.1	17.4
前年比	-0.5	-1.8	-2.9	-1.3	0.1	0.6	0.0	3.4	-1.4	-1.1	3.8
6. 高くても環境負荷の小さい製品を買う	22.4	9.2	8.2	6.1	7.2	8.7	2.9	8.0	4.9	2.9	24.8
前年比	-0.1	-1.9	-1.6	-3.2	0.5	2.2	-0.4	-0.8	-1.6	-1.5	6.7
7. 手間でもゴミを分別する	87.3	1.9	1.5	1.3	1.7	0.8	0.9	1.4	0.9	0.6	3.0
前年比	-0.4	0.0	0.1	0.1	0.1	-0.4	0.2	0.2	-0.3	-0.1	0.6
8. 各種募金に協力する	33.0	12.4	6.2	7.2	4.9	5.1	2.8	4.2	4.3	2.6	22.2
前年比	-4.9	-1.5	-1.1	-1.2	0.6	1.3	0.5	-0.1	-1.1	-1.0	8.1
9. レジ袋を断る	66.4	7.1	4.7	2.2	2.9	1.6	1.5	1.5	2.3	1.9	10.5
前年比	1.2	-1.0	-1.1	0.0	0.1	-0.4	0.1	-0.2	-0.9	-0.4	2.1
10. やたら大食いしない	66.2	8.4	4.0	1.9	2.1	1.4	2.0	0.8	3.2	0.9	11.5
前年比	1.0	-1.1	-1.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.0	-0.7	-0.2	1.9
11. 電気のつけっぱなしなど、無駄にエネルギーを浪費しない	80.5	2.4	2.0	1.2	1.9	0.9	0.8	1.4	1.9	0.5	7.9
前年比	-0.8	-0.2	-0.1	-0.1	0.2	-0.3	0.2	-0.4	-0.1	0.0	1.6
12. お年寄り、体の不自由な方に電車の席を譲る	79.3	2.1	1.0	3.2	0.9	0.8	0.6	0.6	0.9	1.5	10.2

この表において数値は全体の%を表している。「1. 車がないときも信号を守る」を例にとると、「できている、している」が65.9%、逆に実行していないのは34.1%ということになる。実行していない回答者の8.2%が「それほど重要だと思わないから」という回答で最も多い。ついで「その他」7.5%、「そもそもそれがすべきことだとは思わないから」が6.0%と続いている。

下段の「前年比」は前年(2009年調査)との比較を表している「1. 車が・・・」の「できてい

² http://cgi.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/search/1176766_1616.html

る、している」欄での前年比は-3.5%であり、これは2010年調査の数値が2009年調査の数値と比較して3.5%値が小さいことを意味する。即ち、2009年調査の回答率は69.4%だということである。

これらが全て倫理的な行動かという点、やや疑問のある設問も含まれて入る。ごみの分別は多くの地域で義務づけられている（当然のこととして、実行率も高い）し、挨拶やお礼が本稿での倫理の定義「社会を構成する人々が共存するためのルール」というほど大げさなものかとの意見もあろう。ただ、そのような小さなコミュニケーションの一つ一つが社会の基盤を形成する大事な要素である、とここでは判断している。

これを見ると、総じて実行されている割合（%）が高いことが分かる。エネルギーの浪費を避けるなど、自分にもメリットがある項目の実践率が高いことは当然としても、「12. お年寄り、体の不自由な方に電車の席を譲る」など精神的負荷の大きい項目の数値も高い。日常の風景から見て、違和感のある結果も見られるが、少なくとも回答者の“意識”はそのように自己評価しているのだと考えるほかない。

一方で「5. 地域のボランティア活動に参加する」「6. 高くても環境負荷の小さい製品を買う」「4. 高くても地元で作った農作物を買う」といった、実行になんらかの障害（時間、労力、金銭などの負担）のある項目の実行率は低くなっている。

加えて、比較的明確なのは、今年より、昨年の方が、総じて実行率が高いことである（12. お年寄り・・・のみ2010年のみ質問につき、前年比のデータなし）。最も数値が低くなったのが「8. 各種募金に協力する」であり、逆に実行率が高まったのが「10. やたら大食いをしてはいけない」「9. レジ袋を断る」である。厳しい経済情勢が影響し、他者配慮などの余裕がなくなっているのではないかと示唆を得ることができる。

実行しない理由については、それぞれの設問特有の事情が垣間見える結果となっている。これ自体興味深い点だが、紙幅の都合上、詳細な分析はここでは行わない。

結論から言えば、必ずしも強制されない倫理的行為においても、かなりの程度、社会では実践されている、あるいはそう意識されていることが回答結果に表れている。このことは、倫理というものに対する心理的な許容可能性が生活者の心理の中に存在するという点、あるいは妥当な施策を用いることにより、倫理観を活性化させる可能性が存在するということを示していると考えられる。

一方で、2年間のみの比較ではあるが、前年と比較して、より消極的な姿勢に変化していることもわかった。これが継続的かどうかは分からないものの、やはり景気などが、生活者の精神的余裕にも影響するのではないかと仮説を持つことができた。

(2) 倫理的消費に関する意識

次に、消費という、自らの私益を最も優先する私的行為における倫理性について、データを用いて確認してみたい。これは従来から、拙稿で取り上げてきた、「倫理的消費」、あるいは「責任ある消費」にあたるものである。

「自分や身近な人以外、あるいは社会全体のことを考えて消費、支出することがありますか」という質問を「1. 地元（地域）産の野菜などを優先して購入する」などという問いとともに回答者に提示した。その結果が表3である。

この質問は2010年、2009年、2008年の3年連続で同じ質問をしている。「対09年比」というのは、2010年の数字が、2009年の結果と比較してどうかということを表している。前項と同

様に、-2.3%と負の値を示している場合には、2009年の方が、2010年より2.3%数値が大きいことを示す。

まず目につくことは、それぞれの積極的な回答、特に「そう思う」の回答率が、年々下がってきているということである。これは前項でも見られた傾向である。しかも、質問項目にもよるが、大幅に低下しているケースが多い。2008年調査と2009年調査の間いわゆるリーマンショックが発生し、景況感が悪化した時期と重なる。特に消費は所得制約の下での意思決定行為であることから、やはり経済情勢の影響が反映しているのではないかと考える。

ただ、2008年のころは企業不祥事などが頻発した時期にも近く、企業の倫理観などに対する視線が今よりも厳しかった時期でもある。近年、コンプライアンスや情報公開などの面で、企業の姿勢が整ったことも、設問のような内容に対する厳しい姿勢が緩和した原因といえるのかもしれない。

一方、数値の水準に注目すると、やはり企業のコンプライアンスや情報公開に対するニーズが高いことがわかる。そして実際の行動に本当に反映されているかどうかは分からないものの、そのような企業の健全な姿勢は、製品購買の意思決定に影響を与えると回答している割合が非常に多い。(ただし、「購買に対する影響という設問」の、積極的な回答率(そう思う)は、他の設問と比較しても非常に大きく落ち込んでいるという一面もある)

このように、意識の面からは消費の意思決定においても、単に価格と品質だけでなく、その背後にある、供給者(企業)の姿勢や倫理性にも配慮するという回答を得た。そのような“意識”が実際の“行動”にどこまで反映しているかという点については、他の論考で検討しているので、それをご参照願いたい。³

以上、本節では生活者に対する意識調査のデータを通じて、身近な他者配慮行動、あるいは消費選択の場面における、倫理性の影響について確認を行った。その結果、少なくとも意識のレベルでは、完全義務としての法律を超えた、他者配慮、すなわち不完全義務としての倫理に対する関心やコミットの姿勢を捉えることとなった。

ただし、何度も繰り返すが、そのような意識が存在することと、実際の具体的な行動として実践することはイコールではない。その点は注意しなければならないが、倫理性に対する関心の存在を確認することがこの節の目的であり、一定程度の検証はできたと判断する。

生活者が持つ、倫理に関するイメージ

社会の持続可能性を維持していくためには、社会を基礎づけている各種制度の弱点、すなわち「失敗」の可能性を理解し、それに対処する必要がある。新たな制度を取り入れたとしても、現在の所、完全な仕組み・制度は確立されていない。そうであるならば、その制度を管理・運営・実践する者(ヒト)の革新を図ることが必要である。

³ ディスカッションペーパー10-3など。

表3

		%				
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
1. 地元(地域)産の野菜などを優先して購入する	2010年	9.0	36.8	32.5	16.0	5.8
	対09年比	-2.3	0.1	0.3	2.3	-0.3
	対08年比	-3.1	-1.9	1.7	2.6	0.7
2. 不祥事のあった企業の製品は使わない	2010年	11.1	38.8	36.2	11.8	2.2
	対09年比	-3.8	-3.3	4.7	2.6	-0.1
	対08年比	-6.6	-5.1	7	4.2	0.7
3. 社会的に評判が良くない製品やサービスは利用しない	2010年	18.9	53.5	21.3	5.0	1.2
	対09年比	-3.6	-1.5	4	0.9	0.1
	対08年比	-5.4	-1.1	4.5	1.4	0.5
4. 消費者は、その製品がどのように作られたのかを知る義務がある※最近、安い衣料品などが、発展途上の不当に安い賃金で作られていることに対する批判が一部あります。	2010年	18.5	49.1	26.6	4.9	0.9
	対09年比	-3.4	0.7	1.8	1.2	-0.2
	対08年比	-8.7	0.4	5.9	2.2	0.2
5. 企業は、その製品がどのような過程を経てつくられたのかという情報を消費者に提供する義務がある	2010年	23.4	53.0	20.2	2.8	0.6
	対09年比	-4.6	0.6	3.2	0.8	0.0
	対08年比	-10.2	3.2	5.4	1.4	0.2
6. 企業がそのような情報を提供した場合には、それを製品の購買是非の判断で重視する	2010年	16.3	50.5	29.6	2.9	0.7
	対09年比	-3.7	-0.9	3.8	0.8	-0.1
	対08年比	-8.7	-1	8.3	1.3	0.1

それは主権者である国民を一気に超人に変身させることではない。制度にコミットする主権者としての意識や心構えを、漸進的にあるべき姿に近づけていくということに他ならない。そうであるならば、あるべき姿とは何かについて検討し、合意する努力が必要である。もし何らかの形でそのあるべき姿が合意できた場合には、それを個人の自発的取り組みに委ねるのではなく、社会として効果的な施策に反映させ、積極的に取り組み、各人に影響を与えることが必要である。これが本稿での問題意識であり、事実認識を踏まえた主張でもある。

そこで本節では、あるべき姿を議論し、合意するための“前提”となる、「倫理という概念」について、その基礎づけのための情報を提供することを目的として検討を進める。具体的には、生活者に対して「あなたにとって『倫理』とはどういうことを意味する言葉だと思いますか。」という質問を投げかけ、それに対する回答を分析することで、回答者である生活者の心の中に、倫理という言葉がどのように位置づけられているのかを分析する。

方法としては、前節で用いたアンケート調査のデータを用いる。2008年調査において「あなたにとって『倫理』とはどういうことを意味する言葉だと思いますか。間違っているかどうかは気にせず、何でも思いついたことを記入してください。」という質問を設け、テキストを記入してもらう形で回答を得ている。

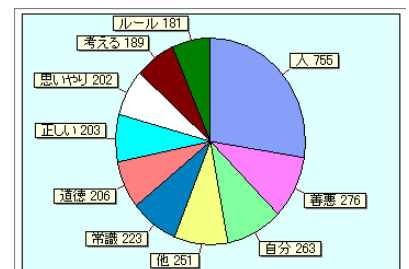
これを TRUE TELLER という、テキストマイニングのソフトを用いて、その内容を分析する。以下、まず、倫理の説明のために、より多く用いられている言葉を集計し、確認した後、二つの言葉の関係（係り受け）を含めて意味を捉えようとする「主な話題」、語の関係を主成分分析という手法を用いて二次元平面上に図示する方法「マッピング」を用いながら、生活者がいかに倫理という概念を理解しているかについて検討する。

(1) 頻出単語

調査は2008年3月に行い、4991名の有効回答数を得た。回答者の偏在を減らすよう、男女別（2カテゴリ）×年代別（5カテゴリ）×地域別（5カテゴリ）＝50のカテゴリを儲け、国勢調査上の人口分布に近似するように回答者を割り付けている。調査方法はネット調査である。2005年から継続しており、基本的にパネル調査である。すなわち同じ回答者に継続して回答を得ている。（ただし、今回の分析においてはパネル調査の特徴を利用していない）

図 1

このような調査において、上で述べたように「あなたにとって『倫理』とはどういうことを意味する言葉だと思いますか。」という質問をテキスト（文字形式）で回答をしてもらった。その結果、最も頻繁に出現した単語（件数）の上位10位までを円グラフに表したのが図1である。「人」に関わることで「善悪」の判断基準であり、「自分」や「他（者）」すなわち社会の領域における、「常識」や「道徳」に関わることである。より細かい内容としては「正しい」ことは何か、それを「思いやり」を持って、「考え」、私たちが共存するための「ルール」に集約する。



このように倫理を捉えていると考えるならば、“全体として”非常に的確に本質を捉えていると判断することができる。もちろん、各個人においては、これら全てのキーワードが心の中に存在しているわけではない。従って、マクロ的に妥当であっても、各キーワードが偏在していることが予想される。従って、これが個人に対する意識付けや啓発が必要であることを否定する理由にはならない。

表4は、図1の10単語を含む上位30語の順位を表したものである（稿末に100位までの表

を掲示)。「判断」「行動」「社会」「迷惑」「基本的」「基準」「心」などという語がランクに入っている。これら 11 位以下の単語を見ても分かるように、本稿での倫理の定義「社会を構成する人々が共存するためのルール」という方向性と大きく違わない単語が抽出されていることが分かる。

(2) 主な話題

次に、単に一つの語の出現頻度だけを見るのではなく、語と語の係り受けも含んで見たときに、どのような話題が出ているかを見てみる。件数で見ると表 5 のようになっている。最も件数が多いのが「善悪－判断する」という、名詞と動詞の組み合わせであることが分かる。

倫理を、価値判断を含んだルールだと理解するならば、「善悪」という価値を表す言葉と、「判断する」という意思の働き、そしてルール化につながる言葉の組み合わせは非常に妥当といえる。

3 位には「人－生きる」という組み合わせが抽出されている。これも人を複数形に理解するならば共に生きるという意味での共存というコンセプトを見つけることができる。5 位や 6 位には「善悪－違う」あるいは「道－外れる」がランキングされている。このように、否定する方向から倫理を捉えているケースがあることは、倫理のルール的特徴が出ている。すなわち、「～すべし」というよりは「～すべからず」という規則の形の方が理解しやすいということであろう。

ランキングの後半には「正しい」という、善悪とは異なる価値判断のキーワードが見られるし、「思いやり」や「心」といった、精神性を表現する言葉も出てきていることがわかる。

これらは何らかの係り受け関係を示す組み合わせを抽出しているが、前項 (1) で見た、頻出単語が別のどの単語と多く用いられているかを見ることもできる。ただし、この場合は名詞－動詞といった、文法上の関係が明確でないものも含まれる。

例えば、(1) で最も頻度の多い語であった「人」の場合、図 2 のような言葉が同時に用いられる場合が多いことが明らかになる。これだと「人－道」という組み合わせが最も多い (94 件) ということになっている。やはり、人の道として道徳や倫理を捉えている回答者が多いようだ。

頻度が二番目に多かった「善悪」についても同様に同時利用状況を見てみると図 3 のようになっている。善悪という価値に対して、判断、区別、基準などの操作を加える言葉がつながりを作っている。

表4

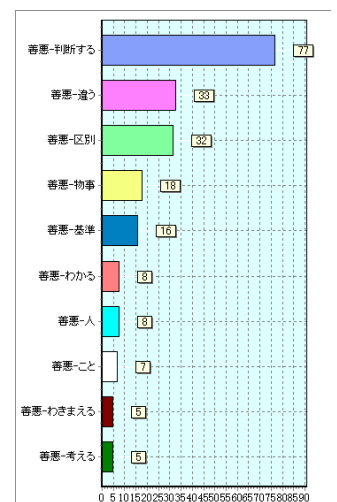
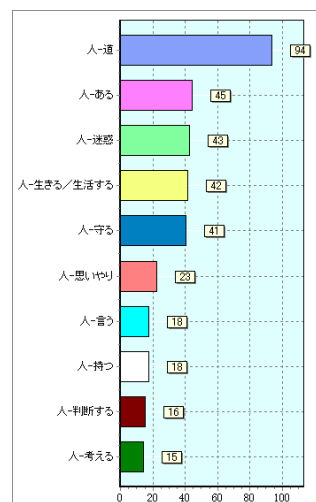
	単語	品詞	頻度	割合(%)	件数
1	人	名詞	842	25.04	755
2	善悪	名詞	279	9.15	276
3	自分	名詞	280	8.72	263
4	他	名詞	258	8.32	251
5	常識	名詞	227	7.40	223
6	道徳	名詞	208	6.83	206
7	正しい	形容詞	217	6.73	203
8	思いやり	名詞	204	6.70	202
9	考える	動詞	202	6.27	189
10	ルール	名詞	190	6.00	181
11	生きる/生	動詞	185	5.97	180
12	人間	名詞	187	5.94	179
13	判断する	動詞	161	5.17	156
14	行動する	動詞	140	4.48	135
15	道	名詞	135	4.44	134
16	守る	動詞	130	4.25	128
17	社会	名詞	120	3.95	119
18	迷惑	名詞	119	3.95	119
19	ある	動詞	118	3.88	117
20	持つ	動詞	120	3.78	114
21	心	名詞	113	3.68	111
22	違う	動詞	112	3.52	106
23	世の中	名詞	96	3.15	95
24	基本的だ	形容詞	87	2.85	86
25	物事	名詞	86	2.85	86
26	わかる(否)	動詞	84	2.79	84
27	特になし	名詞	82	2.72	82
28	言う	動詞	73	2.32	70
29	基準	名詞	66	2.12	64
30	悪い	形容詞	59	1.92	58

表5

No.	単語1	全体	単語2	タイプ	頻度	テキスト件数
1	善悪	276	判断する	名-動	78	77
2	人	755	ある	名-動	45	45
3	人	755	生きる/生活	名-動	46	42
4	人	755	守る	名-動	41	41
5	善悪	276	違う	名-動	33	33
6	道	134	外れる(否定)	名-動	29	29
7	ルール	181	守る	名-動	28	28
8	常識	223	ある	名-動	26	26
9	人間	179	生きる/生活	名-動	24	23
10	自分	263	考える	名-動	21	21
11	常識	223	持つ	名-動	18	18
12	人	755	言う	名-動	18	18
13	人	755	持つ	名-動	19	18
14	人	755	判断する	名-動	17	16
15	必要だ	36	生きる/生活	形-動	16	16
16	人	755	考える	名-動	15	15
17	自分	263	正しい	名-形	14	14
18	思いやり	202	ある	名-動	13	13
19	心	111	持つ	名-動	13	13
20	物事	86	判断する	名-動	13	13
21	ルール	181	生きる/生活	名-動	12	12
22	筋	18	通る	名-動	12	12
23	思いやり	202	持つ	名-動	13	12
24	自分	263	嫌だ	名-形	12	12
25	道	134	正しい	名-形	12	12
26	物事	86	考える	名-動	12	12
27	区別	40	つく	名-動	11	11
28	社会	119	生きる/生活	名-動	11	11
29	人	755	嫌だ	名-形	12	11
30	人	755	行動する	名-動	11	11

図 2

図 3



(3) マッピング

マッピングという手法を用いれば、このような言葉の関係を構造的、視覚的に表すことができる。主成分分析という方法を用いて抽出した評価尺度を軸として、2つ選び（通常は第1主成分と第2主成分）このスコアを2次元平面上にプロットすることでマップを描くことができる。それを行ったのが図4である。

ここで単語が点線でつながっている言葉は関連性が高いことを示している（距離が近いことも同様に関連が深いことを示している）。これを見ると、倫理というイメージを形成する上では大きく4つのグループ（イメージ）が存在していることが分かる。

図4

一つは重心に近い、主となる概念を形成しているグループで、まず、「モラル」「道徳」「基本」「常識」「道」といった、倫理と親しい言葉でイメージを置き換えている。それが「自分」という一人称とつながっており、そこから「心」「考える」「持つ」という言葉に展開している。

このことから、自らの心の中にある道理を探り当てるという観点から、倫理を理解、イメージ化しているグループの存在と考えることができるであろう。

一方、図の上部には「他」「思いやり」「迷惑」という語

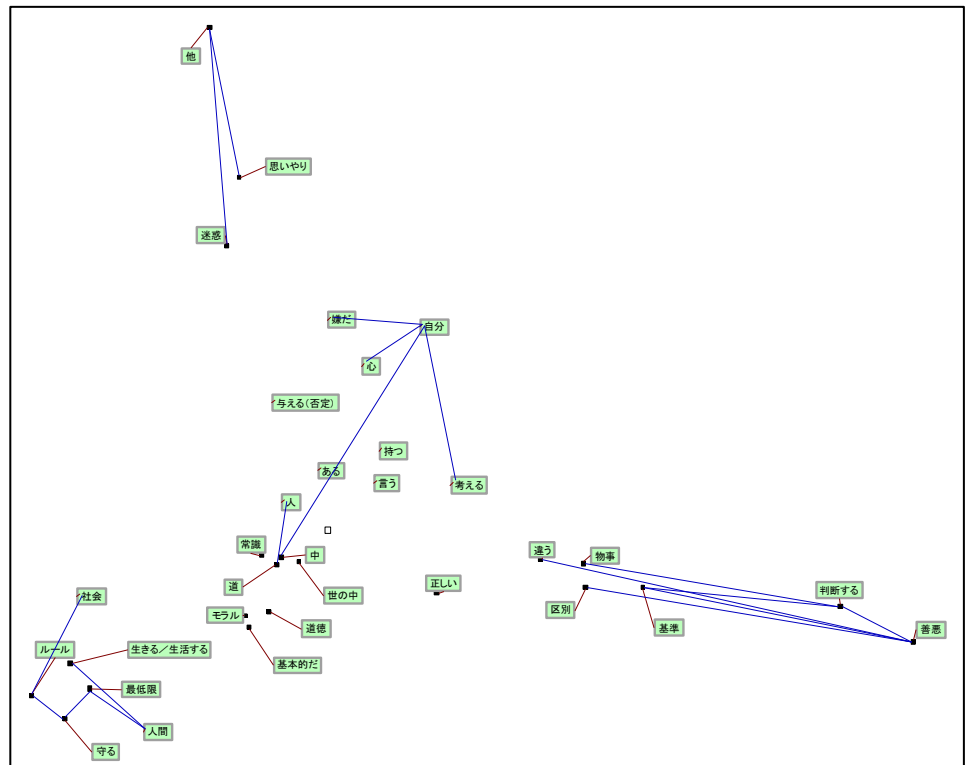
が配置されている。これは自省的に倫理を捉えるというよりは、他者との関係の中で倫理を理解しようとしている姿を現している。その際、特に相手に対する配慮が明確な形で現れている。

これと関連しているもので、図の左下にあるのが「ルール」「社会」「守る」「人間」といった、規範性を強く意識したグループである。ここでは他（者）という個別性よりは、「社会」という全体性がより強く意識され、その中での守るべきルールという形で倫理が把握されている。

本稿での倫理の定義が「社会を構成する人々が共存するためのルール」であることを考えると、このような理解は非常に近いものだといえる。一方で、その背景にはやはり個別な存在としての他者への配慮や思いやりが基礎づけられている必要があるとも考える。その意味では、図の上にあるイメージ（言葉のグループ）と、左下にあるイメージ（言葉のグループ）の距離がもっと近くにあること、線で結ばれていることが望ましい。

逆に言えば、それが今後、倫理を持続可能な社会形成に活用する際の必要条件として理解されるべきなのかもしれない。

第4のグループは図の右下にあり、「善悪」「判断」「区別」「基準」といった、価値“判断”の要素が強調されている。これも倫理の価値的性質を的確に捉えたグループであると評価できよう。



このように、主成分を用いてマッピングしたことで、①自らの心の中にある道、②他者と共存するための配慮、③社会という集団の中でのルール、④善悪という価値判断の基準、といった異なった性質を持つ存在として、倫理がイメージされているのではないかという示唆を得た。

これらのイメージはそれぞれに意義のある理解である一方、個人の心の中を見たとき、どれか一つだけが切り離されて存在していることは望ましくない。これらが総合され、体系的に各人の意識の中に基礎付けられたとき、初めて持続可能な社会を支える理念として、倫理が役立つのではないかと考える。

最後に

以上、持続可能な社会や生活の構築には制度の失敗を補うような取り組みが必要であり、社会を構成する生活者の倫理性の再構築が今後、非常に重要になってくるはずだとの問題意識を持った。その上で、単に個人の心構えだけを訴える（期待する）ことにあまり意味はなく、社会として明確な価値意識を持って、倫理性の確立にコミットする必要があるのではないかと考えた。そのためには倫理というような、一般に非常に曖昧な概念として捉えられている言葉が、実際には生活者の意識の中でどのように理解され、心の中で位置づけられているのかを知る必要があると判断した。

それを明らかにすることによって、倫理に対する一層の理解が深まるとともに、どのような形で実際の生活に基礎づけていけるかについての議論や合意につながることを望ましい。

以上のような考えのもとで行った、データ分析の結果をまとめると、以下の通りである。まず、倫理的価値に対する生活者の意識は総じて積極的であった。一方で、時系列で見るとこれらに関して若干の意識の減退が確認された。検証はしていないものの、景気動向が心の余裕をなくす方向に働いたことで、このような変化が現れているのではないかとの仮説を提示した。

消費面での倫理性も、一定以上の意識の高まりは確認できたが、これも同様に、時系列（3 年）における意識の低下を確認した。この場合、景気以外にも、不祥事事件の対応が一定程度進んだことで関心が薄れたという可能性もあるのではないかとの考えを示した。（それぞれの仮説検証は行っていない）

倫理とは何か、について記述されたデータを確認すると、社会との共存やルール意識など、大きな方向性としては健全な結果が得られているように思われた。一方で、倫理の理解が 4 つほどに分かれている可能性を示唆する分析を紹介した。それらはそれぞれに妥当であるが、補完関係にあるともいえるため、個人として、総合的な理解が促されるべきだと考えた。

そのためには、今後の倫理に関して体系化し、その重要性を訴える必要がある。従って、今回のような、生活者の意識に関する基本的な理解の促進を目的とする取り組みも含め、基礎、応用、様々な研究を行っていく必要がある。

なお、本稿では、倫理について回答されたテキストデータを分類したり、マッピングしたりしたが、他の属性と組み合わせた分析は行っていない。（例えば、性別や年齢別）これに関しては、残された課題として別の稿にて論ずることとする。

以上

（2010 年 12 月 28 日）

<参考文献>

- 塩野谷祐一（2002）『経済と倫理 福祉国家の哲学』，東京大学出版会
 豊田尚吾（2008）「倫理的消費の可能性と課題」生活経済学会関西部会 2008 年度研究大会報告
 豊田尚吾（2009a）「責任ある消費者の意志決定に関するデータ分析」生活経済学会 2009 年度第 25 回研究大会報告
 豊田尚吾（2009b）「責任ある消費者の消費意志決定と消費行動に関する構造分析～行動理論モデルを用いたデータ分析～」日本経済学会 2009 年年度秋期大会報告
 豊田尚吾（2010）「責任ある消費者の意思決定と消費行動に関するデータ分析～多母集団の同時分析～」生活経済学会 2010 年度第 26 回研究大会報告
 山脇直司（2002）『経済の倫理学』，丸善株式会社

<頻出単語上位 100 位>

	単語	品詞	頻度	割合(%)	件数		単語	品詞	頻度	割合(%)	件数
1	人	名詞	842	25.04	755	51	法律	名詞	29	0.96	29
2	善悪	名詞	279	9.15	276	52	ない	形容詞	29	0.90	27
3	自分	名詞	280	8.72	263	53	真面目だ	形容詞	27	0.90	27
4	他	名詞	258	8.32	251	54	できる	動詞	26	0.86	26
5	常識	名詞	227	7.40	223	55	周り	名詞	27	0.86	26
6	道徳	名詞	208	6.83	206	56	価値観	名詞	26	0.83	25
7	正しい	形容詞	217	6.73	203	57	感じる	動詞	25	0.83	25
8	思いやり	名詞	204	6.70	202	58	筋道	名詞	25	0.83	25
9	考える	動詞	202	6.27	189	59	言動	名詞	25	0.83	25
10	ルール	名詞	190	6.00	181	60	通る	動詞	25	0.83	25
11	生きる/生	動詞	185	5.97	180	61	道理	名詞	26	0.83	25
12	人間	名詞	187	5.94	179	62	する(否定)	動詞	25	0.76	23
13	判断する	動詞	161	5.17	156	63	気持ち	名詞	25	0.76	23
14	行動する	動詞	140	4.48	135	64	行う	動詞	23	0.76	23
15	道	名詞	135	4.44	134	65	行為	名詞	25	0.76	23
16	守る	動詞	130	4.25	128	66	社会生活	名詞	23	0.76	23
17	社会	名詞	120	3.95	119	67	する	動詞	23	0.73	22
18	迷惑	名詞	119	3.95	119	68	優しさ	名詞	22	0.73	22
19	ある	動詞	118	3.88	117	69	誰	名詞	21	0.70	21
20	持つ	動詞	120	3.78	114	70	わかまえる	動詞	20	0.66	20
21	心	名詞	113	3.68	111	71	相手	名詞	22	0.66	20
22	違う	動詞	112	3.52	106	72	社会的	名詞	19	0.63	19
23	世の中	名詞	96	3.15	95	73	大切だ	形容詞	19	0.63	19
24	基本的だ	形容詞	87	2.85	86	74	不快だ	形容詞	19	0.63	19
25	物事	名詞	86	2.85	86	75	しつかり	形容詞	18	0.60	18
26	わかる(否定)	動詞	84	2.79	84	76	教える	動詞	19	0.60	18
27	特になし	名詞	82	2.72	82	77	筋	名詞	18	0.60	18
28	言う	動詞	73	2.32	70	78	理解する	動詞	18	0.60	18
29	基準	名詞	66	2.12	64	79	一般的だ	形容詞	17	0.56	17
30	悪い	形容詞	59	1.92	58	80	言葉	名詞	18	0.56	17
31	最低限	名詞	57	1.86	56	81	公正だ	形容詞	20	0.56	17
32	倫理	名詞	60	1.69	51	82	自己	名詞	17	0.56	17
33	やる	動詞	46	1.49	45	83	知る	動詞	17	0.56	17
34	マナー	名詞	44	1.46	44	84	分別	名詞	17	0.56	17
35	モラル	名詞	44	1.46	44	85	社会通念	名詞	16	0.53	16
36	中	名詞	44	1.46	44	86	取る	動詞	16	0.53	16
37	やる(否定)	動詞	41	1.33	40	87	何	名詞	16	0.50	15
38	区別	名詞	40	1.33	40	88	決める	動詞	16	0.50	15
39	良い	形容詞	41	1.29	39	89	今	名詞	15	0.50	15
40	外れる(否定)	動詞	39	1.26	38	90	信念	名詞	16	0.50	15
41	嫌だ	形容詞	38	1.26	38	91	恥じる(否定)	動詞	15	0.50	15
42	社会的だ	形容詞	37	1.23	37	92	恥ずかしい	形容詞	16	0.50	15
43	わかる	動詞	36	1.19	36	93	秩序	名詞	15	0.50	15
44	見る	動詞	40	1.19	36	94	律する	動詞	15	0.50	15
45	正義	名詞	37	1.19	36	95	冷静だ	形容詞	16	0.50	15
46	必要だ	形容詞	36	1.19	36	96	はっきり	形容詞	14	0.46	14
47	正直だ	形容詞	34	1.13	34	97	貫く	動詞	14	0.46	14
48	正義感	名詞	32	1.06	32	98	言う(否定)	動詞	14	0.46	14
49	基本	名詞	29	0.96	29	99	実行する	動詞	15	0.46	14
50	当たり前だ	形容詞	34	0.96	29	100	反する(否定)	動詞	14	0.46	14